

# 競技的スポーツ集団における

## サーバント・リーダーシップと協同作業認識に関する研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1415032 鈴木裕香里

### 1. 研究動機・研究目的

昨今、部活動の指導場面において、体罰や不適切指導など、様々な問題が注目されている。部活動の指導は典型的なトップダウンによる指導が問題になっており、選手たちが主体的に活動していくボトムアップ方式への転換が求められている。

本研究では、産業場面において、企業不祥事が多発した背景により注目されたリーダーシップ理論のひとつとしてGreenleaf(1977)が提唱した「サーバント・リーダーシップ」に着目する。指導者の意識変革を推進していく上で、近年日本において注目され始めているサーバント・リーダーシップが、全てのスポーツチームにおいて、競技者に対して最大限の成果をもたらすかに関しては、非常に重要であると考えられる。また、集団スポーツにおいては、コミュニケーションは必要不可欠であり、監督、スタッフ、先輩、後輩に関わらず、同じ目標に向かって個々が努力することが重要であるという観点から言えば、協同作業認識を高めることが不可欠になると考える。協同作業認識とは、成員間のコミュニケーションや相互信頼感にポジティブな影響を及ぼすものであるとされ、肯定的な協同作業認識の醸成は、集団スポーツのパフォーマンスに貢献するとともに、そのパフォーマンスを評価するための有益な指標となり得る。そこで本研究では、サーバント・リーダーシップと協同作業認識の関係を日本語版 RSLP-S と協同作業認識尺度の2つの尺度を用いて明らかにし、大学運動部活動におけるチームマネジメントの新たな知見を提供することを目的とする。

### 2. 研究方法

【調査対象】 J大学の運動部活動に所属する1年生から4年生(年齢問わず)

【調査期間】 2018年10月1日から10月31日

【調査方法】 ・フェイスシート ・日本語版 RLSP-S ・協同作業認識尺度 ・自由記述欄

### 3. 主な結果と考察

本研究において、日本語版 RLSP-S 全体の合計点と協同作業認識尺度全体の合計点の相関分析を行った結果、有意差が見られ、J大学の運動部活動所属者におけるサーバント・リーダーシップと協同作業認識には正の相関があるということが明らかになった。サーバント・リーダーシップは、奉仕や支援を通じて、周囲から信頼を得て、主体的に協力してもらえらる状況を作り出すと言われているため、成員間のコミュニケーションや相互信頼感にポジティブな影響を及ぼすものである協同作業認識とは相関がみられたのだと考える。

日本語版 RLSP-S 得点高群と低群における協同作業認識尺度得点の比較をし、ヒストグラムを作成したところ、90点および100点を境界として、大きく3つの得点群に分かれていることが明らかになった。「日本語版 RLSP-S 得点<90」のチームを「低群」、「90≦日本語版

RLSP-S 得点<100」のチームを「中群」、「100≦日本語版 RLSP-S 得点」のチームを「高群」とした。低群、中群、高群における協同作業認識尺度得点の比較を行う為に、一元配置分散分析を実施した。日本語版 RLSP-S 得点高群と低群における協同作業認識尺度得点の比較において、日本語版 RLSP-S 得点高群は低群・中群よりも協同作業認識尺度得点が有意に高いことが明らかになった。得点高群の学生は、指導者のチームにかかる時間や選手をよく見てくれていることなど、指導者にプラスの評価をしている人が多く、指導者がいることでチームの方向性が示される、選手が変化するきっかけを与えてくれるなどチームが良くなっていることを実感していると考えられる。

#### 4. 結論

- (1)指導者のサーバント・リーダーシップとチームの協同作業認識には相関が認められた。大きな理由としては、サーバント・リーダーシップは、指導者からの奉仕や支援を通じて、周囲から信頼を得て、主体的に協力してもらえらる状況を作り出すと言われているため、成員間のコミュニケーションや相互信頼感にポジティブな影響を及ぼすものである協同作業認識とは相関が見られた。
- (2)日本語版 RLSP-S 得点高群は低群・中群よりも協同作業認識尺度得点が有意に高いことが明らかになった。指導者からの奉仕や支援を評価している選手は、チームに対する想いも強くなり、チームの為に頑張ろうという思考になりやすいと考える。
- (3)立場による日本語版 RLSP-S 得点および協同作業認識尺度の比較において、「ベンチ入り」と「それ以外」に有意差がみられた。理由としては、「ベンチ入り」の選手は、自分自身をレギュラーとして使ってくれないことで評価に影響が出ている、また、それによってチームに対する想いも薄くなっているのではないかと考える。
- (4)部活動ごとで日本語版 RLSP-S と協同作業認識尺度の相関分析を行った結果、硬式野球部において有意な差が見られた。理由としては、対象の中で唯一学生監督というチーム方針をとっているため、他の部活動に比べて、監督と選手の距離感や関わる回数・支援の多寡等が優れており、チーム全体で良いチームを作ろうという気持ちが大きいのではないかと考える。

#### 5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文の執筆にあたり、お忙しい中知識不足の私に多くのご指導を頂きました水野基樹先生に心から感謝申し上げます。また、卒業論文だけでなく、2年以上の活動を通して、他の組織では学ぶことのできない数多くのことをスポーツ経営組織学ゼミナールで学び、知識の面だけでなく、人間的な面でも大きく成長させていただきました。ここで得た学びは、これからの社会人生活の中でも大切にしていきたいと思っております。また、スポーツ経営組織学ゼミナールの大学院生である、山越さん、高鷹さん、杉浦さん、菅野さんにもたくさんのアドバイスを頂きました。本当にありがとうございます。アンケート調査にご協力いただいた皆様にも感謝しています。アンケート実施を快く快諾して下さった皆様のご協力がなければ、本論文の完成まではたどり着けませんでした。心より御礼を申し上げます。

私は順天堂大学、そしてスポーツ経営組織学ゼミナールで培った力を糧に社会人になっても頑張りたいと思います。今まで、本当にありがとうございました。